様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月　 ７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２０５５

研究課題名（和文）インドにおける近代的宗教表現の展開とその影響

研究課題名（英文）The Development of Modern Expression of Religiosity in India and Its Significance

研究代表者
冨澤　かな（Tomizawa, Kana）

東京大学・附属図書館・特任准教授

研究者番号：８０５０３８６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：「近代的宗教概念」の西洋近代的なバイアスは様々に批判されてきたが、本研究では、近代インドの、ネオ・ヴェーダーンタからM. K. ガーンディーらの言説と、タイル・絵画・英人墓地の墓石などの形象表現を対象に、近代的宗教概念それ自体に、すでに非西洋世界側の主体性が刻まれていることを明らかにし、議論に新たな位相をひらくことを目指した。その結果、インドにおいて、宗教／世俗をめぐる言説が、必ずしも西洋の既製の概念の受入ではないかたちで主体的に展開していたこと、また新たな経済環境の元、東／西、伝統／近代の対立を超えたグローバルで新たな宗教表現が成り立ち展開していたことが確認された。

研究成果の概要（英文）：“Modern concepts of religion” have long been criticized as modern Western constructs subsequently imposed on the rest of the world. At the same time, however, we need to note that this critique holds the risk of neglecting the agency the non-Western world exerted in shaping modernity. This research project examines the agency of the non-Western world in constructing modern concepts of religion, with particular focus on the discourses on the religious and the secular by Neo-Vedanta and M. K. Gandhi, and figurative expressions in modern India, such as tile decoration, paintings, and tombstones of British cemeteries. The important findings were that their religious/secular discourses were neither a simple consumption nor rejection of Western concepts, but were quite uniquely, yet globally, developed, and that new religious figurative expressions came about due to global economic changes, beyond the East/West and tradition/modernity dichotomies.

研究分野：宗教学

キーワード：宗教概念　近代インド　植民地　セキュラリズム　スピリチュアリティ　ネオ・ヴェーダーンタ　M. K. ガーンディー　タイル

１．研究開始当初の背景

これまで、多くの人文社会系諸分野で、近代とそこで生み出された諸概念の批判がなされてきた。特に代表者が専門とする宗教学では、「世俗性」や「世俗化」、さらには「宗教」という概念も、西洋近代的な構築物であり、それが非西洋に当てはめられたことでさまざまな齟齬やゆがみが生じてきたという批判がなされてきた。その意義は明らかではあるが、しかし、「西洋近代」の支配力を強調することで、近代世界の構築において非西洋世界が果たした役割が受動的なもの、被害者的なものに矮小化されかねないという矛盾も生じてきた。そこで本研究では、実際のところ、インドで、またアジアで、宗教性と世俗性がどのように語られ、立ち現れてきたのかを見直し、そこから、宗教・世俗・近代の三つを見る視点を少しでも多様化したいと考えたものである。

２．研究の目的

これまでの近代的宗教概念批判は、もっぱら西洋近代の概念の非西洋への適用の困難とそれへの対応という文脈に即していたが、上記のように、それを重ねるほどに、東西の壁と権力構造を追認してしまうというジレンマも抱えてきた。本研究では、宗教学のほか、美術史や政治学と連携し、現在の宗教研究や宗教論を支えている近代的宗教概念それ自体に、すでに非西洋世界側の主体性が刻まれていることを、近代インドの言説と形象、双方にわたる宗教表現を対象に明らかにすることで、宗教概念論に新たな位相をひらくことを目指した。

３．研究の方法

本研究では、近代的宗教概念論を批判的に継承し展開するため、宗教学の議論と、インド宗教史、インド美術史、インド政治思想史との接合を重視した。研究代表者の冨澤かなと研究協力者の間永次郎（以下すべて敬称略）、平野久仁子は、ネオ・ヴェーダーンタの動きとM.K.ガーンディーらの近代インドの宗教言説の相互関係の解明を進め、また研究分担者の豊山亜希と冨澤は、建築、絵画、墓石を対象に、近代インドにおける新しい宗教表現の独自の展開と流通の研究を進めた。活動の展開にあたっては、初年度の平成 27 年の国際ベンガル学会と、最終年度 29 年の国際学会でのパネル発表およびシンポジウム開催を大きな区切りとした。

４．研究成果

（１）研究の方向性

本研究では、代表者・分担者・協力者である冨澤・豊山・間・平野の間で、それぞれの専門性に応じた研究を展開、共有してきた。冨澤は、近代インドの宗教概念の展開を“spirituality”の語彙の用例から検討する作業を継続しつつ、新たに近代インドにおける“secular”関連語彙の用例へと調査研究を広げ、また、インドの英人墓地の墓石意匠の調査も継続的に展開してきた。豊山はカルカッタの邸宅建築における、特にタイルを用いた空間表現の変遷の検討を進めるとともに、新たにインドの近代画の潮流を藩王国の近代美術コレクションから見直し、従来一般的であった、ラヴィ・ヴァルマーらの油彩の系譜とベンガル派との対立図式自体を再考する作業を進めてきた。間はガーンディーの思想の展開を細かく検証する博士論文を完成し、そこから、ガーンディーにおける人間の二面性の認識やこれに対する議論の重要性と根本的な一元論の方向性とがどのように成立・共存したのかを、ヴィヴェーカーナンダ的なネオ・ヴェーダーンタとの関わりとともに検討してきた。平野は日本人仏教僧とヴィヴェーカーナンダの関係等の研究を継続するとともに、ヴィヴェーカーナンダの、特にカルマ・ヨーガ論を核とするヨーガ論と、これとは系譜を異にするハタ・ヨーガの理論の検討を進めてきた。これらはすべて、近代インドの宗教表象の多様性を新たな視点で見直すことを目指す試みであり、相互に情報と意見を交換しつつ、3 ヵ年の研究活動を進めた。

（２）研究活動の展開

平成 27 年度は当初計画通り、12 月 12-13 日開催の国際ベンガル学会を核に研究を進めた。本学会では、The Dynamics of Religion in Modern Bengal I-IV として 4 つのパネルを編成した。冨澤、豊山、間、平野の協議のもとパネル編成を進め、最終的に冨澤、豊山、平野を含む計 13 名からなる 4 パネルで、本研究事業の目的にふさわしい発表と議論がなされた。参加者のうち、ストックホルム大学のフェルディナンド・サルデラ、ベンガル・アカデミーのサイモン・ザカリアは本科学研究費により招聘した。他に、海外から台湾大学の李宥霆とラジュシャヒ大学のモストファ・トリクル・アフシャン、国内からは福内千絵、稲賀繁美、スワーミー・メーダサーナンダ、澁谷俊樹、臼田雅之、置田清和の参加を得た。美術史研究、ネオ・ヴェーダーンタ研究、バウルやガジャンの人類学的研究、ヴァイシュナヴァ研究等、多様なテーマ、方法論の発表がなされたが、一貫して近代ベンガルにおける「宗教」なる現象と概念の問い直しが行われることとなり、大きな成果を得た。また、12 月 18 日には冨澤が所属する東京大学附属図書館 U-PARL との共催で、ワークショップ“Archiving of Asia in Asia”を開催し、上記のサルデラを講師に、他に東京外国語大学（当時）の足立享祐と東京大学の宮本隆史をコメンテーターに迎えて、インドにおける宗教関連の貴重資料のデジタル化とオープンアクセス化のプロジェクトをモデルに、アジア研究における資料の保存・利用・共有のあり方について議論した。

平成 28 年度は当初計画どおり、前年の国際ベンガル学会の成果を基盤に、29 年度の国際学会アプライに向け、その成果を共有・展開した。本科研メンバー外でも、例えば福内がインド近代美術の神表象の見直しをめぐる成果を継続的に発表するなど、本研究計画の助成により構成したパネルのメンバーがその成果を進展させている例が見られ、また、冨澤がこの学会のプロシーディング編集に協力するなど、継続性のある活動を展開することができた。

29 年度は成果のまとめと公開に注力した。近代インドの宗教言説を中心とする研究に関しては、3 月 6 日に MINDAS（人間文化研究機構「南アジア地域研究」国立民族学博物館拠点）との共催で国際セミナー From Noviolence to Non-Violence: India ’s appropriate answer to unique question set by British Colonialism を開催、続いて 3 月 9 日に科学研究費基盤研究(B)「ポスト・セキュラー状況における宗教研究」（代表・鶴岡賀雄）との共催でシンポジウム Secular Religiosity and Religious Secularity: Rethinking the Asian Agency in the Shaping of Modernity を開催した。この成果の上に、30 年 7 月にデリーで開催される AAS in Asia にパネル Secular Religiosity and Religious Secularity: Rethinking the Indian Agency in the Shaping of Modernity で参加する予定である。また、形象表現を中心とする研究では、3 月にワシントンで開催された AAS にパネル Follies, Mosques, and Majolica Tiles: Imagining the Colonial Built Environment in the Indian Ocean で参加した。

（3）形象表現のグローバルな展開

形象表現に関する研究の最大の成果は上記の AAS でのパネル発表である。本パネルは、豊山、マサチューセッツ工科大学のアリンダム・ダッタ、カリフォルニア大学バークレー校のスガタ・レイをパネリストに、冨澤がオーガナイザーとディスカッサントをつとめて実施した。ダッタは 18 世紀のイギリスとインドに同時的に生じた装飾的建築物“Follies”の発生を論じ、それぞれの文化圏の「古典」「宗教」との関係の差異を分析した上で、その背景にイギリスの経済危機に始まる東インド会社のインド進出とそれに伴う「ローマ法」導入の動きが大きく関わっていたことを明らかにした。レイは、しばしば西洋建築の粗雑な模倣と批判されてきた、アジアの「新古典主義」的なモスクについて、その批判が安易な東西二元論に基づくことを指摘し、インド洋に展開したコスモポリタニズム的で主体的な建築表現と見る視座を示した。豊山は、英領インドのタイル文化の展開が、支配者と被支配者の一対一のオリエンタリズム的な関係におさまるものではなく、イギリス、インド、そして日本を含む広域的な経済の歴史の中で何層にもわたり、多様な表現形態へと展開してきたことを明らかにした。冨澤の墓石意匠研究でも確認されてきたことだが、インドおよびアジアの近代的な表象、ことに宗教表現は、「誤読」を含む多様で多層的な文化の行き来の中で、経済その他の多様な動機付けと条件付けの下、極めてグローバルに展開してきたものであり、西洋近代の所産の受容/拒否という枠に収まるものではないことが明らかになった。

（4）近代的宗教概念の多元性の再考

言説に関する研究の最大の成果は、3 月に開催した上記のシンポジウム、Secular Religiosity and Religious Secularity である。本シンポジウムでは、まず冨澤が、近代インドにおける spirituality と secular に関わる語彙の用法を例に、近現代の宗教論の基本語彙が、必ずしも西洋で確立してから他地域に受容されたわけではなく、相互に関わりつつ時には非西洋世界が先行しつつ、ともに展開してきた可能性を指摘し、近代の多様な宗教性・世俗性を分断せず論じる視座をいかに得ていくか、本シンポジウムの論点を示した。インド工科大学ティルパティ校の A. ラグラーマラージュは、科学と宗教の関係性について、これを対置した上で科学を上位に置くガリレオモデル、両者の接合を求めつつ、宗教を上位に置くヴィヴェーカーナンダらのモデル、そして対置した上で宗教を上位に置くガーンディーモデルの 3 つで整理・分析した上で、ただしガーンディーの科学／宗教の対立軸が、東西とはずらされており、そこにグローバルな広がりの可能性があったことを指摘した。間は、ガーンディーが晩年に secularism を主張したことが、従来の彼の宗教観と矛盾するとの指摘に対し、それがむしろ、アドヴァイタ・ヴェーダーンタとタントラの思想と関わりつつ展開した彼のブラフマチャルヤ思想に即した極めて宗教的なもので、対立構造の超越・統合を求めるその思想が、自らの内面にも、ヒンドゥー・ムスリムの関係を含む国家にも適用されていたとの視座を示した。台湾大学の李宥霆は、Liang Shuming（梁漱溟）を焦点に、その思想の展開におけるインドと仏教の役割を分析し、そこから、近代中国知識人の文明観が、東／西と近代／伝統という強力な対立軸を前にしながら、特に仏教と儒教、科学と社会の発展などをめぐり、インドと、時に日本を含めた、「アジア」の多様な可能性を様々に解釈しながらより複雑に展開していたことを明らかにした。中島隆博は、テイラー、ハーバーマス、ベラーのポスト・セキュラリズム論を分析、宗教と世俗の間の対話と「翻訳」の可能性と限界、世俗／宗教の区別自体が成り立たない新たな段階の問題意識を論じ、その中で、聖俗の双方に関わりつつ相互変容していく可能性や、世俗の過去に埋め込まれている宗教性の再読から、特にアジアにおいて、現

在・未来の社会における宗教性のあり方を見直す可能性を指摘した。これらを受け、宮本久義は、特に「インド思想」「インドの伝統」の内実の多様性を指摘、それぞれの文脈で意識されている「霊性」「アドヴァイタ」「対立の統合」「仏教」などの内実がなんであったか、詳細な腑分けの必要性と可能性を指摘した。また藤原聖子は、近代的宗教概念をめぐる従来の議論において、“Multiple Secularities”の視点が重視されてきたことを指摘した上で、その先に多様な文脈をこえて、また実践と学知の境を越えて共有しうる語彙を求めることの意義を指摘、それぞれに“overlapping”な概念をどう求めうるかがあらためて問われた。宗教概念の多様な展開の内実を問うことは、ともすれば文化ごとに異なる近代性があるという文化特殊論に傾きがちであるが、本シンポジウムでは、文脈性の認識の先に、共有可能な語彙と議論を構築していく努力の意義が確認された。この議論は、（２）で述べた、30年7月のAAS in Asiaで引き続き継続される予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１３件）

① 冨澤　かな、「Times of Indiaに見る近代インドの“secularism”の語用の展開」、『宗教研究』91（別冊）、pp. 353-355、2018年。
http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2018/01/vol_91.pdf
(DOI未定)

② TOYOYAMA, Aki, “Transaction and Translation of Modernity: Japanese Majolica Tiles in Colonial India,” *Proceedings of History of Consumer Culture 2017 Conference: Objects, Desire and Sociability*, pp. 111-121, 2018.

③ 平野　久仁子、「ヴィヴェーカーナンダの四つのヨーガ論：形成と展開をめぐって」、『宗教研究』91（別冊）、pp. 357-358、2018年。
http://jpars.org/journal/bulletin/wp-content/uploads/2018/01/vol_91.pdf
(DOI未定)

④ 間　永次郎、「ガーンディーの身体とチャウリー・チャウラーの暴動：第一次非協力運動停止の背後にあった性欲統制の失敗」、『アジア・アフリカ地域研究』17（1）、pp. 39-72、2017年。
DOI: 10.14956/asafas.17.39

⑤ HAZAMA, Eijiro, The Paradox of Gandhian Secularism: The Metaphysical Implication behind Gandhi’s ‘Individualization of Religion',” *Modern Asian Studies*, 51 (5), pp. 1394-1438, 2017.
DOI: 10.1017/s0026749x16000354

⑥ 阿部　卓也、加藤　諭、木村　拓、谷島貫太、冨澤　かな、宮本　隆史、「アジア・環太平洋地域のナショナルデジタルアーカイブ政策――文化資源の統合と連携の諸相――」『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』、92、pp. 27-68、2017年。
http://hdl.handle.net/2261/72519

⑦ 豊山　亜希、「インドのマジョリカ熱―イギリス統治下のインドにおける日本製タイルの消費について」『美術フォーラム 21』32、pp. 83-88、2015年。
https://ci.nii.ac.jp/naid/40020709312

⑧ 冨澤　かな、「インドから見る一八世紀末西洋近代墓地の出現と受容」、『宗教研究』88（別冊）、pp. 339-340、2015年。
DOI: 10.20716/rsjars.88.Suppl_339

⑨ 間　永次郎「ガーンディーの共同体思想における性の問題について」『宗教研究』、88（別冊）、pp. 344-345、2015年。
DOI: 10.20716/rsjars.88.Suppl_344

〔学会発表〕（計２７件）

① TOYOYAMA, Aki, “Majolica Fever in India: Sanitary Aestheticism in the Age of Colonial Empires,” Association for Asian Studies 2018 Annual Conference, Washington D.C.: Marriott Wardman Park, 24 March 2018.

② TOMIZAWA, Kana 、“ Introduction: Rethinking Spirituality, Secularity and Modernity from Asia,” Symposium: Secular Religiosity and Religious Secularity: Rethinking the Asian Agency in the Shaping of Modernity, Tokyo: The University of Tokyo (Hongo), 9 March 2018.

③ HAZAMA, Eijiro, “Secular Religiosity in Colonial India: Gandhi’s Experiments with the Body Politic,” Symposium: Secular Religiosity and Religious Secularity: Rethinking the Asian Agency in the Shaping of Modernity, Tokyo: The University of Tokyo (Hongo), 9 March 2018.

④ 平野　久仁子、「ヴィヴェーカーナンダと日本人仏教僧の交流から：織田得能と堀至徳の訪印をめぐって」、第74回日本南アジア学会月例懇話会、東京都：東京大学（本郷キ

ャンパス)、2018 年 1 月 27 日。

⑤ HIRANO, Kuniko, “Vivekananda and Japanese Buddhists: Their Encounter and Interaction,” Workshop: Buddhism in shaping India-Japan Relations（二国間交流事業（JSPS-ICHR）主催)、府中市：東京外国語大学、2017 年 10 月 7 日 。

⑥ TOYOYAMA, Aki, “Majolica Tiles from Japan: India Modern and Nationalism in Colonial Architecture,” Political Economy Tokyo Seminar, Tokyo: University of Tokyo, 25 September 2017.

⑦ 冨澤 かな、「Times of India に見る近代インドの“secularism”の語用の展開」、日本宗教学会第 76 回学術大会、東京都：東京大学本郷キャンパス、2017 年 9 月 16 日。

⑧ 平野 久仁子、「ヴィヴェーカーナンダの 4 つのヨーガ論:形成と展開をめぐって」、日本宗教学会第 76 回学術大会、東京都：東京大学本郷キャンパス、2017 年 9 月 16 日。

⑨ HAZAMA, Eijiro, “The Paradox of Gandhian Secularism: The Metaphysical Implication behind Gandhi’s ‘Individualization of Religion',” International Convention of Asian Scholars 10, Chiang Mai: International Exhibition and Convention Centre, 23 July 2017.

⑩ HAZAMA, Eijiro, “Rethinking Gandhi’s “Secularism”: The Unique Integration between Religion, State, and Celibacy,” Fifth International Conference on Asian Studies 2017, Ottawa: Saint Paul University, 17 June 2017.

⑪ TOMIZAWA (KITAZAWA), Kana, “The Development of the Modern Use of the Term “Spirituality” in and around Late 19th-Century Bengal,” The 4th International Congress of Bengal Studies, Tokyo: Tokyo University of Foreign Languages, 12 December 2015.

⑫ TOYOYAMA, Aki, “Modernity, Hybridity and New Identities: Architectural Representation of the “Black Town” in Late Colonial Calcutta,” The 4th International Congress of Bengal Studies, Tokyo: Tokyo University of Foreign Languages, 12 December 2015.

⑬ HIRANO, Kuniko, “Vivekananda and Japanese Buddhists: The Background Concerning their Encounter and Interaction,” The 4th International Congress of Bengal Studies, Tokyo: Tokyo University of Foreign Languages, 12 December 2015.

⑭ 間 永次郎、「ガーンディーの宗教政治思想のいくつかの知られざる起源について：『伝統的影響』の再考」、2015 年度アジア政経学会秋季大会、茨城：常磐大学、2015 年 10 月 17 日。

⑮ 豊山 亜希「マールワーリーの近代的アイデンティティとしての日本製マジョリカタイル」、日本南アジア学会第 28 回全国大会、東京：東京大学、2015 年 9 月 27 日。

⑯ TOMIZAWA (KITAZAWA), Kana, “The Development of the Modern Concept of “Spirituality” in India: The Usage of the Term by Vivekanada and his Contemporaries,” XXI IAHR World Congress 2015 (World Congress of the International Association for the History of Religions), Erfurt: Erfurt University, 25 August 2015.

⑰ TOMIZAWA (KITAZAWA), Kana, “18th-Century Obelisk-shaped Tombs and the Plurality of Funeral Culture in Colonial India: A Death and Life Studies Perspective,” XXI IAHR World Congress 2015 (World Congress of the International Association for the History of Religions), Erfurt: Erfurt University, 25 August 2015.

⑱ TOYOYAMA, Aki, “Japanese Majolica Tiles and National Aestheticism in Late Colonial Asia,” The 9th International Convention of Asia Scholars, Adelaide: Adelaide Convention Centre, 7 July 2015.

〔図書〕（計４件）

① 豊山 亜希（他・著)、インド文化事典編集委員会（編)、『インド文化事典』（分担執筆担当：第 15 章「アート・芸術」巻頭言（p.563)、項目「博覧会と美術行政」（pp.588-589)、コラム「写真」(p.599)「芸術と多文化主義」(p.600))、総ページ数 806、丸善出版、2018 年。

② 間 永次郎、「マハートマー・ガーンディー晩年における『世俗主義』について」、足羽與志子・中野聡編『平和と和解研究：思想・経験・方法』pp. 19-59、総ページ数 420、旬報社、2015 年。

６．研究組織

(1)研究代表者

冨澤 かな (TOMIZAWA, Kana)

東京大学・附属図書館・特任准教授

（30 年度より、静岡県立大学・国際関係学部・准教授）
研究者番号：８０５０３８６２

(2)研究分担者
豊山　亜希　　(TOYOYAMA, Aki)
近畿大学・国際学部・講師
研究者番号：４０５１１６７１

(3)連携研究者
なし

(4)研究協力者
間　永次郎　　(HAZAMA, Eijiro)
東京大学大学院・総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員（PD）
研究者番号：なし

平野　久仁子　　(HIRANO, Kuniko)
上智大学・アジア文化研究所・客員所員
研究者番号：なし